

保 育 奉 公

大 東 亞 戰 爭 必 勝 完 遂

明治天皇御製

母が手にひかれてあゆむうなるこのたちごまりては董つむなり

この春の野で、畏くも御目にままつた情景であらうか。光榮の母よ、光榮の子よ。春光ゆたかに充ちて、あかるくもあたゝかい霞と陽炎の中に、うつかりうつまされてゐる母子馳蕩の畫面である。われらも亦うつかり、そのうちに溶け入らせていたゞくばかりである。

たゞ、またしても詩になりきれぬ、さかしらの想ひを、そこに挟ませていたゞくすれば、自然に對する幼兒の強き興味、それを満足させてやらうとして、わざ／＼手をひいて共に歩む母の心を、幼兒教育者として考へずにはゐられないのである。この御製と同じ春に

をさな子につませまほしと思ふかな董花さく庭をめぐりて

の御製を謹誦し奉る。幼稚園では、觀察の名に於て、幼兒に自然を與へることをすゝめられてゐる。その教育的意義に就てはいろ／＼の理がある。しかも、幼兒の心が如何に強く自然に惹かれてゐるかを先づ察することなしに、幼兒の自然觀察をほんたうに導くことは出来ない。自然を與へてさう教育しようといふ前に、先づ自然を與へてやりたい心、これを離れて、保育としての觀察は生きない。

それにしても、この母は、たゞ手をひいて我が子を野に連れ出したゞけであらうか。立ちごまりては、よろこびに目を輝せて紫の董を摘むわが子を、さう導いて摘ませてゐるのであらうか。手をひくだけで心を導かなかつたら惜しい。——同じく美しい畫面も、いろ／＼に描いてみるこゝが出来る。

(倉橋惣三謹誦)